

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 二木 博史



学位申請者 包宝海（Bao Baohai、バオ・バオハイ）

論文名 中国内モンゴルにおける集合的記憶

—モンゴル民族の英雄ガーダー・メイレンを事例として—

【審査結果】

本学位請求論文は、モンゴル民族の英雄ガーダー・メイレンとかれを指導者とする反開墾蜂起（1929-1931年）に対する評価を、記憶論の立場から論じたものだが、蜂起当時、中華人民共和国成立後の1940、50年代、文化大革命期、1980年代以降現代までの各時期について、メディア、フォークロア、文学・芸術作品、オーラル・ヒストリーなどを資料にして検討し、ガーダー・メイレンがモンゴル人の重要な“記憶の場”として機能したことを明確にしめすことに成功している。

清朝の崩壊と中華民国の成立によって政治的に周縁化され、清朝末期以降の漢人の開墾による牧地の喪失によって経済的、社会的に危機的状況におかれていた内モンゴル東部のモンゴル人の抵抗運動が各時期にどのような集合的記憶を形成したかについて研究することは、漢民族を主体とする国民国家中国における民族間の複雑な関係の分析にきわめて有効であり、本論文はこの分野の今後の研究に貢献しうる成果だと評価された。

テーマの選択、理論的なわくぐみ、使用された資料の質、先行研究の批判的参照、結論の独自性のいずれにおいても、本論文は博士論文にもとめられる水準に十分に達している。

よって審査委員会は、論文審査と最終試験（公開審査）の結果にもとづき、全員一致で、学位申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当と判断した。

2016年1月27日におこなわれた最終審査には、本学の教授二木博史（主査、研究指導担当教員）、岩崎稔（主任指導教員）、米谷匡史（研究指導担当教員）、金井光太朗、今井昭夫が参加した。

【論文の概要】

本論文は、本文（159ページ）、参考文献から構成される。全172ページ。

本文の構成は、以下のようである。

序論

第1章 集合的記憶について

第2章 歴史叙述としての「ガーダー・メイレン蜂起」

第3章 「記憶の場」としてのガーダー・メイレン

第4章 内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶の形成とその変遷

第5章 草の根社会におけるガーダー・メイレンの記憶と語り

結論

序論では、今日の中国で“モンゴル地域の階級闘争の指導者”として公式的に位置づけられ、かれの蜂起をテーマにしたウリゲルト・ドー（民謡の一種）が国の無形文化遺産にも登録されているガーダー・メイレン（Gada Meiren, 1892-1931）の表象が、時代ごとにいちじるしく変化してきことを確認するとともに、初期の歴史的、文学・芸術学的な研究から近年の社会的、記憶論的な研究にいたるまでの先行研究を概観し、その問題点として、ガーダー・メイレンの記憶の根源やそれぞれの時期での記憶の形成過程が十分に論じられていないこと、分析の対象がウリゲルト・ドーにほぼ限定されていることを指摘し、本論文ではフォークロアにとどまらずすべてのジャンルの芸術作品、オーラル・ヒストリーを分析の対象にして、ガーダー・メイレンの記憶の形成の全過程を検討するとのべる。

第1章では、モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶論」とそのごの記憶論の展開を整理したあと、中国における記憶論研究の状況をくわしくサーヴェイし、「文化大革命」「南京虐殺」など重要な歴史事件を対象とした集合的記憶の研究では成果があがっている反面、イデオロギー上の制約のため、「公式的記憶」に対抗するかたちで存在する「マイナーな記憶」や草の根社会における記憶の問題が軽視されてきたと指摘する。ガーダー・メイレンの記憶を研究してきた内モンゴルの研究者による記憶論の受容についても検討し、ウリゲルト・ドーを素材にして記憶論の立場から博士論文をかいた姜迎春（Jiang Yingchun）の研究を評価しつつ、権力装置によって排除された「非公式的な記憶」についての考察が不十分だと批判する。

第2章では、ガーダー・メイレンの蜂起の背景となった内モンゴル東部ホルチン左翼中旗における農地開墾の歴史とモンゴル人社会の変容、ガーダー・メイレン本人の生い立ち、経歴をのべたあと、1929年にはじまった蜂起のプロセスを詳述する。とくに、当時の奉天（現在の瀋陽）で刊行されていた『盛京時報』『東三省民報』の記事を援用し、蜂起軍の規模、メンバー、行軍ルートをくわしく検討している。現在の中国における公式的な歴史記述ではガーダー・メイレンの蜂起は「反封建闘争」「反軍閥闘争」とされ、漢人農民も蜂起軍に協力したことが強調されているが、当時の報道により、おもな攻撃対象が地元の

漢人であったこと、モンゴル人が蜂起軍を支援したことが確認できるとし、公的な資料集の記述には作為がふくまれている可能性があることを指摘する。他方、さまざまな伝記で記述されているような、蜂起軍への漢人匪賊団の参加については、当時の定期刊行物でも報道されているので、信憑性がたかいとする。

第3章では、蜂起当時から最近までのガーダー・メイレンの表象を分析し、ガーダー・メイレンがいかにか「記憶の場」（ピエール・ノラ）として機能したかをしめした。1930年代初期に南京の国民党政府の対モンゴル政策担当機関から刊行されていた雑誌や、東北軍閥の根拠地奉天で出版されていた新聞では、ガーダー・メイレンの蜂起軍はモンゴル人の匪賊集団として非難されている。ところが、中華人民共和国が成立すると、かれは反動的な軍閥とモンゴル人封建領主に抵抗した階級闘争の指導者、代表的な「モンゴル民族の英雄」として政府から特別な評価をあたえられる。しかし1960年代に文化大革命がはじまり、当時の有力なモンゴル人指導者を攻撃するための材料としてガーダー・メイレンの評価の問題がとりあげられると、その蜂起は支配階級内部の矛盾と解釈され、かれは国外への逃亡をはかろうとした「祖国に対する裏切者」として指弾された。文化大革命がおわると、ガーダー・メイレンは「名誉回復」をとげ、反軍閥、反封建、反帝国主義（反日本）の闘争の英雄として、さまざまな芸術作品でとりあげられようになり、モンゴル人作家郭雪波（Guo Xuebo）の長編小説（2011）にみられるように、草原を開墾からまもるためにたたかった「環境保護のパイオニア」という評価まであらわれた。以上のような、さまざまな時期の多様なガーダー・メイレンの表象は、かれがつねに「再記憶化」される「記憶の場」として機能したことをしめしていると結論づける。

第4章では、内モンゴルでガーダー・メイレンの記憶が具体的に形成されたプロセスを詳細に分析している。とりわけ民間の語り手ホールチたちがガーダー・メイレンを主人公にした長編の民謡ウリゲルト・ドーを創作したこと、それらが伝承されるなかでさまざまな異本がうまれたことをのべ、これまでしられている24種類のテキストをとりあげている。民謡ウリゲルト・ドーはホールチによって、さらに「ホーリン・ウリゲル」という語り物につくりかえられ、再記憶化され、ラジオなどのメディアをとおして拡散しひとびとに共有された点も重視する。中国共産党の文芸政策、とりわけ1958年の「民謡運動」のなかで、社会主義の理想をうたいあげた多数の新民謡がつけられたこととの関連にも言及し、ガーダー・メイレンが社会主義中国にふさわしい英雄として表象化されたことをのべる。またガーダー・メイレンの蜂起を主題にした歌劇、小説、映画、テレビドラマにも注目し、実際には具体的接点がなかったはずの日本人を登場させて反帝国主義的側面を強調している事例など、集合的記憶生成の具体例もしめしている。

第5章では、ガーダー・メイレンの蜂起が実際におこった地域で実施した調査により収集したオーラル・ヒストリー資料にもとづき、内モンゴルの草の根社会におけるモンゴル

人の同蜂起についての記憶を検証している。ひとびとの記憶の形成にもっともつよい影響をあたえているのは、蜂起の目撃者をふくむ老人たちの語りと民謡ウリゲルト・ドーの内容だとかんがえられるが、草の根社会においては、「階級闘争の英雄」という公式的な評価とはことなり、モンゴル人と漢人の対立という図式のなかで「モンゴル民族の英雄」「モンゴル民族の犠牲者」として記憶されている場合があることを指摘する。同時に、かれらの記憶はきわめて多様な要素をふくみ、「モンゴル人と漢人の共同の利益のためにたたかった英雄」あるいは「匪賊」としてのガーダー・メイレン像もまざっており、公式的な記憶とマイナーな記憶がせめぎあっている現実があることを強調する。

結論では、時代ごとにガーダー・メイレンの表象がどのように形成され集合的記憶が生成されてきたかを、「社会的フレームワーク」の変化によって説明するとともに、今後の研究課題を展望する。

【論文の評価】

清朝が成立した 17 世紀には支配者マンジュ人の有力な同盟者としてのモンゴル人の帝国内での地位はたかく、かれらの土地と文化は法律によってまもられたが、19 世紀以降、内モンゴル東部は政策的な、あるいは非公式の漢人による開墾によって農業化、漢化がすすみ、とくに中華民国の成立後は、そのうごきが加速した。本論文であつかわれているホルチン左翼中旗（旗は行政単位）は、大都市をのぞけば、現在でも内モンゴルでもっともモンゴル人が集中している地域であり、ガーダー・メイレンの反開墾闘争は、漢人の進出からモンゴル人の伝統的生活空間をまもるための最後の手段としておこなわれたとみるのが、中国以外の研究者の一般的な解釈であろう。

他方、現在の中国ではガーダー・メイレンは、非漢民族の階級闘争の代表的な指導者として物語化され、モンゴル語から漢語に訳されたガーダー・メイレンの歌は、全国ネットのテレビでも放送されている。

このような多様な表象をもつガーダー・メイレンは記憶論的研究の対象にふさわしく、論文のテーマの選択はきわめて適切だと判断される。

本論文でとくに評価すべきは、以下の点である。

- (1) 一貫して集合的記憶論という理論的わくぐみをまもり、ガーダー・メイレン研究にこの方法論が有効であることを明示的にしめした。
- (2) 1930 年代から現在にいたるまでの各時代のガーダー・メイレンの表象の変化をおい、それぞれの特徴を鮮明にうかびあがらせた。
- (3) オーラル・ヒストリーの手法で内モンゴルのモンゴル人の記憶の実態をあきらかにした。とくに公式的な記憶と対置されるマイナーな記憶の存在を確認し、相互の関係につ

いて分析した。

(4) 中国での記憶論をサーヴェイした部分は、ヨーロッパにおける議論とのちがいを明確化した点で一定の貢献をした。

(5) 蜂起当時の定期刊行物に掲載された記事を発掘し、蜂起軍のくわしい行軍ルートをあきらかにするなど、実証的な面でも成果をあげた。

つぎに、今後の課題として審査委員からだされたコメントは以下のようである。

(1) モーリス・アルヴァックの古典的な記憶論、あるいはピエール・ノラの「記憶の場」の概念の参照と適用という点では評価できるが、著者独自の記憶論に対する理論的な貢献という点では、ものたりない。

(2) ガーダー・メイレンの蜂起を主題にしたウリゲルト・ドー（物語性を有する民謡）のテキストの分析は詳細になされているものの、漢語版もあり日常的にうたわれ、日々イメージが再生産されている「ガーダー・メイレンの歌」についての分析が不十分ではないか。

(3) 漢民族中心の国民国家形成過程のなかで、外モンゴルのモンゴル人との関係もふくめ、内モンゴル東部のモンゴル人が、どのような集団意識、アイデンティティをもっていたのか、についての考察があったほうがよかった。

(4) ガーダー・メイレンの死によって蜂起はおわっているので、「非業の死をとげた者の追悼による共同体の再構築」の問題についての考察があればよかった。

(5) 「匪賊」は、民衆のなかの秩序原理、「正義の感覚」を具現したアウトロー的な抵抗者としての位置づけも可能ではないか。

(6) 5本の雑誌論文（2本はすでに発表、3本は掲載予定）にもとづき博士論文が作成されたためか、議論の一部が重複している場合がある。

うえのコメントは、包宝海氏の研究成果を十分評価したうえで、今後の研究にさらに期待する意味でなされたものだが、これらに対する同氏の受けこたえは具体的かつ誠実であり、現段階での研究の到達点と今後の展望を十分に自覚していることが確認された。

論文の内容と最終試験の結果を総合的に判断して、審査委員会は全員一致で、上記の結論に達した。